

2025年4月27日 主日礼拝 復活節 第2主日 週報番号3461号

説教題：「**主の証人となる人生**」

聖書箇所：ルカによる福音書24章36-53節（161頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 42 交読詩編：詩編112編1 - 10節（125頁）

讚美歌：83/53（地よ、声たかく）/463（わが行くみち）/579（主を仰ぎみれば）/27

「今週の聖句」〔…罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる〕…あなたがたはこれらのことの証人となる。〕（ルカ伝24：47 - 48）

「牧師室の窓」 「新学期クラス・先生何々と急いで語る子らの報告」

「登校の児らを見守る人々は新一年の声に励まされ」

(1)皆様おはようございます。先週は復活日・イースターの礼拝を迎えることができました。主なる神に感謝いたします。本日は復活節第2主日で、「主の証人となる人生」を主題・テーマにして礼拝の時を持ちます。

先週の月曜日4月21日に、ローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇がお亡くなりになりました。心から哀悼の意を捧げます。天の御国へ行かれますことに感謝をもってお見送りをいたします。イタリア・バチカン・サンピエトロ大聖堂にて葬儀が昨日執り行なわれました。本日の午後3時には、文京区にある東京カテドラル聖マリア大聖堂にて追悼ミサが予定されています。

フランシスコ教皇は平和の推進に行動力・実践力のある方でした。フランシスコ・パパさんは2019年11月に日本に来られ広島・長崎を訪問、平和を願う言葉を発言されました。「主の証人となる人生」を歩んで来られたことを私たちにお示しになりました。

今般の訃報に対して、日本政府は首相から感謝と哀悼の言葉を発信されました。一方で、日本基督教団からのメッセージがあって欲しいと願っています。カトリック教会もプロテスタント教会も東方正教会も共に手を携えて祈り合うことこそが、この地球上から戦争や貧困をなくし平和を実現させる具体的方法であると思います。日本基督教団も東京教区も北支区も実行して頂きたいと願っています。

(2)本日の聖書箇所はルカによる福音書24章36節から始まります。弟子たちが集まっていた。ペトロも、エマオ村の家で復活のイエス様と食事をした二人の弟子も、ここに加わっています。

この場所はイエス様と過越(すぎこし)の夕食を共にした、最後の晩餐の場所と思われます。

その家の2階に集まっているのでしょうか。…イエス様の復活は事実なのだろうか、どうしたらよいのだろうか、不安と混乱とが弟子たちの心に渦巻いています。私たちの心も不安に支配されると、判断をすることが難しくなってきます。36節37節を見てみましょう。〔(24:36)こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。(24:37)彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。〕新約聖書の並行記事であるヨハネ福音書の20章19節には「…弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」と書かれています。復活のイエス様は室内に入ってこられ、弟子たちの誰も見ることができ、つまり、認識できる「彼らの真ん中に立」たれたのです。

そして、〔「あなたがたに平和があるように」と言われ〕ました。「平和」とは、ギリシア語でエイレネーと言う言葉です。ヘブル語(ヘブライ語)のシャロームと言う言葉の翻訳語です。シャロームの意味は平安・無事・幸福と言う意味であり、加えて、日常の挨拶言葉になっています。例えば、ルカ福音書10章5節には、イエス様が弟子たちを町や村に派遣するに際しての注意事項として、〔どこかの家に入ったなら、まず、『この家に平和があるように』といいなさい。〕と教えておられます。ですから、今日の19節の「あなたがたに平和があるように」とは、「みんな元気です

か」と言う意味になるでしょう。併(しか)し、そのように声を掛けられた弟子たちは「恐れおののき、亡霊を見ているのだと思」いました。無理もないことです。

(3) イエス様はすかさずに言葉を発して、弟子たちに理解してもらおうと試みられます。38節～40節です。〔(24:38)…イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。(24:39)わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えたとおり、わたしにはそれがある。」(24:40)こう言って、イエスは手と足をお見せになった。〕イエス様は弟子たちに、「わたしの手や足を見なさい」「触ってよく見なさい」と視覚と触覚で確かめることを促しています。つまり、十字架で処刑された時に受けた手足の傷の痕跡をチェックして、イエス本人であることを確認しなさいと促されたのです。

半信半疑状態の弟子たちに対して、イエス様は更に言葉を続けられて、弟子たちの疑念を取り除こうと、次の方策をお示しになられます。41節〔(24:41)彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。〕弟子たちにとっては、イエス様が復活をされることは生前にイエス様から聞いていたが、理解をしていなかったのです。また、お墓を見に行った婦人たちからも復活されたことを聞いていたものの、理解をしてはいなかった、と言うよりは、理解することが出来なかったという方が実態でしょう。

私たちが事柄をうわの空で聞き流し、しっかりと理解せず判断をすることをしない、現状を理解しようとしないので、将来に対する適切な対応を怠ってしまいます。つまり、理解が表面的であり、身に付いてはいないことに注意をしなければなりません。

踏み込んで言えば、2020年1月から地球規模でのコロナウイルスによるパンデミック危機が始まり、数年を経過して、コロナ前とコロナ後とは、世界の状況が様変わりしています。

1つ目には、現在は情報通信革命の時代と言える程に数年間で大きく変化しています。

2つ目には、地球上の世界各国での利害対立が表面化しており、地球温暖化防止など従来は人類共通のチャレンジ目標であった国際協力が捨て去られようとしています。

3つ目には、日本の社会も含めて、不確実性が高く、経済や政治や社会の混乱に対応しなければならない状況です。その様な客観的状況の中で、重要なことは、不安を更に増す情報ネットのフェイク情報ではなく、聖書の御言葉をしっかりと身に付けた判断力であると私は思います。

いま、日本基督教団や東京教区が焦点を絞って考えるべきことが存在しています。放置されては誠に残念、嘆かわしいことです。どうしてその様になるのか、それは同じような考え方の人たちのみが集まっていたは、目が曇り遮(さえぎ)られてしまい、心の目を開く状態ではないからだとは私は思います。異なる、多様な考えを議論・検討し、改革へと行動することが不可欠です。

(4) 42節43節です。弟子たちはイエス様の「ここに何か食べ物があるか」との問い掛けに対して、今日の夕食用に用意していたのでしょう。「焼いた魚の一切れ」をイエス様にお出ししました。すると、イエス様は、その焼き魚を「彼らの前で食べられた」のでした。36節～43節までの聖書の記述は現場に居合わせた新聞記者がその目で見て来たかのようにリアルに報告されています。場面展開にリズム感があり、私たちもその場に居合わせているかのように感じられます。ルカ福音書の記者の記述力が優れていることを理解することが出来ます。そう言えば、ルカ福音書は1章1節2節に記されている様に報告書ですから、臨場感があるのですね。

ここで43節の「彼らの前で食べられた」この言葉に注目してみましょう。食べることは、生きることです。エネルギーを得て、身体を動かすこと、考えることができます。現代の日本の社会の中で、食事が満足にできない貧困の実態があります。この事実・実態に対して、キリストの教会は口を閉ざしてはなりません。私は信徒時代に、担当していた会社の経営者・社長に対して、会社

を発展させる、裏返して言えば、会社を衰退させてはならないことに注力してきました。加えて、日本では新しい事業にチャレンジしようとする精神/アントレプレナーシップと言いますが、その精神が不足・欠落しています。これは日本の学校教育では教科書で学ぶことを優先していることが弊害になっていると思います。発想力やチームワークを育てることによって、一人の独立した市民を育成するシステムとなるべきことが、その様にはなっていないことが原因でありましょう。教会にあっては、教会学校教育の中で、発想力やチームワークを育てることが大切であると私は思います。

(5)44節からは弟子たちが何をすべきなのかについて、役割課題について、イエス様が弟子たちに伝えています。44節では、旧約聖書のモーセ五書・イザヤ書などの預言者の書物や詩編の大切さを述べています。45節では、聖書を理解するには「心の目を開」くことが重要であると教えています。人間は自分自身で心の目を開くことは難しいですが、併し乍ら、心の目が開かなければ自分自身を変えることができないのです。この矛盾をどの様に乗り越えるのか、解決するのが、46節に書かれているメシア・キリストの復活を信じる信仰です。

イエス・キリストの教えの根本は、第1に神の国は来た、あなたの罪は赦されたであり、第2に神を愛し、隣り人を愛しなさいと言うことに尽きます。

この第1と第2は別物ではなく、表裏一体になっています。従って、47節48節に記されている様に「罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」ことが入カスイッチとなるのです。これこそが「心の目を開」く力の源になります。48節には「(24:48)あなたがたはこれらのことの証人となる」と書かれています。「証人」とはギリシア語でマルテュス、見聞きしたことを伝える者と言う意味で、後のローマ帝国による弾圧の時代には「殉教者」と言う意味にもなりました。キリストの証人を貫いた人たちです。新約聖書の使徒言行録1章8節には「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまでわたしの証人となる。」と書かれています。証人としての活動範囲は広く大きいことを示しています。

(6)ルカ福音書の最後の4節、つまり、50節～53節には祝福・ほめたたえと言う言葉が3回記されています。ギリシア語のエウロゲオー、英語のblessingと言う言葉です。その意味は、神から祝福を受けると共に、神を賛美することが同時に行なわれる、つまり、一方通行ではなく、神と人間との両方からの相互のコミュニケーションになります。祝福と讃美とが同時に行なわれる空間はまさに礼拝の空間であります。50節の「手を上げて祝福された」とは、新たな力が発揮されることを示しています。(祝福/レビ記9:22、祈り/詩編28:2、63:5)

弟子たちは復活の主に会いました。それは大きな喜びであり、人間としての肉体の死を超える命があることを体験したのです。弟子たちも女性たちも共にそのことを体験し、キリストの証人へと変えられて行きました。皆様もこれまでの人生の中で、ご自身の人生が変えられたという体験をお持ちでしょう。例えその様な経験がなくても、変革の種が与えられているのです。新約聖書の中に、「種を蒔く人のたとえ話」があります(ルカ8:14-15、マタイ13:1-9、マルコ4:1-9)。蒔かれた種が良い実を結ぶことをキリストは願ひ応援していることを記しています。「復活の信仰」とは、私たちが夫々の人生を歩いていく時の心の推進力・励ますエネルギーとなるのです。それは馬鹿々々しいものではなく、生物学や医学の知識で判断できるものとは異なります。

復活の主と共に「主の証人となる人生」の日々を歩いて参りましょう。

・・・お祈りします。

イエス・キリストの主なる神様。私たちは、主の十字架の出来事を経て、主の復活・イースターの日を先週の日曜日に迎えることができました。ありがとうございます。神の恵みに感謝します。これからも信仰を導いて下さいますようお願いいたします。

神が創造されましたこの地球上に生きる一人ひとりに平安と希望が与えられますように。災害や戦争の只中にある一人ひとりに慰めがありますように、お守りください。

私たちに知恵と勇気をお与え下さい。

教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 **アーメン**